

平成 26 年度 児童生徒の平和に関する図画・作文コンクール
作文の部 < 講評 >

近年、戦争体験者の高齢化が進み、歴史的事実の風化が懸念される中、『平和行政推進事業』の一環として、『児童・生徒の平和に関する図画・作文コンクール』の企画の意義は大きい。また本事業の趣旨は、歴史の事実を次の世代へ正しく継承し、平和を尊ぶ心を育てることにある。作文を書くという創作活動により、その趣旨が生かされ、作文の内容にも、小・中学生らしい視点から、子ども一人一人の限りない平和への願いを綴った素直な作品が多く寄せられた。

一つ目に、子ども達は、授業や演劇、また戦後の悲惨な事故や戦争遺跡の追体験、戦争体験者の体験談を聞くなどの多様な学びの中で貴重な教訓を得ている。そして、子ども達が作文という創作活動を通して、戦争や平和を考え、『友達と仲良く、命を大切に、平和を願う、不戦を誓う』など、未来に平和を創造することの大切さを学び、発信していることが心強い。

二つ目に、子ども達が書く活動を通して、自ら思考し、文章構成を考え、表現を工夫することは、学校教育に求められている、「思考力、判断力、表現力」の育成にも資する貴重な機会になっていることも論を待たない。作品からみる創作活動への子ども達の前向きな姿勢や平和メッセージの発信も、平和への関心及び意識の高揚に繋がり、歴史の事実を次世代に正しく継承し、平和を尊び、創造する本事業の趣旨に沿うものである。

※審査については、内容を重視し、表現方法、小・中学校の発達段階も加味しながら、慎重且つ丁寧に審査するとともに、下記の記述の通りの結果を報告し、講評とする。

1、入賞は、村長賞（2名）教育長賞（4名）優秀賞（6名）入選（11名）計23名が入賞。応募数 71名のうち入賞は、小学生 17名、中学生6名となっている。

全体的に本事業の趣旨が、子ども達に理解され、昨年度より応募数が若干増えた。本事業と作文の内容との整合性が図られ、平和を希求する作品が多かった。

2、村長賞の作文には、「戦争が終わったというのに、こんな悲しいことが起こるなんて！」この記述に象徴されるジェット機事故の悲惨な現況に心を痛め、平和への祈りを捧げる小学生。また語り部が減っていく中、未来に平和を創造していくために、自分達に何ができるかを真剣に考え、平和、友達、

命をキーワードに次の世代に不戦の誓いを語り継ぐことが私達の役割だという中学生。このような小・中学生らしい決意や姿勢に頼もしさや心強さを感じられた。

3、教育長賞の小・中学生の作文には、戦争と平和、そして今の沖縄の置かれた状況や立場に疑問を抱いたり、平和で毎日が幸せでいられることに結びつけたり、未来が平和であるために大切なことは何かを、読み手一人一人に問いかけるなど、平和への強い思いを感じられた。

4、他の入賞作品や入賞を逸した作品にも、子ども達の平和への思いが素直に表現されている。

5、小・中学生とも、体験談や物語などの読書体験や学芸会で自ら演じた体験劇による戦争の悲惨さを通して、実相や情報を理解し、平和の有り難さや命の大切さを知り、その思いを表現するという、子ども達の平和への関心と意識の高まりを感じることができた。